

術が安全で確実性の高い止血法として近年注目されている。この方法を用いて食道静脈瘤の塞栓を行い良好な結果を得たので、若干の考察を加えて報する。

23. 大腸癌の他臓器合併切除例の検討

藤田昌宏、高橋秀禎、中野喜久男
西村 明、浅野武秀
(千葉県がんセンター消化器科)

診断技術の進歩に伴い早期大腸癌が発見される一方、大部分は進行癌であり、就中、隣接臓器に癌着、浸潤ないし転移し合併切除を要する例が稀でない。切除例124例中合併切除した20例について、合併切除臓器、原発巣の占居部位、R-number、組織学的分類、および腹膜播種転移、肝転移、漿膜浸潤の程度とリンパ節移について組織学的転移度と率について検討し、予後の面について言及した。

24. 小児腹部腫瘍における開創照射の経験

江東孝夫、高橋英世、大沼直躬
若山芳彦、針原幸男、青柳 博
(千大・小児外科)

小児悪性固形腫瘍の術中照射療法は、目的とする部位に選択的に照射ができ、正常組織の照射を最小限にすることができる。また、長期にわたる術後照射をくり返さないで済み、照射療法後の、他の治療法を早められる等の利点がある。最近、我々は、3例の小児腹部悪性腫瘍に、術中照射療法を施行したので、その臨床報告をするとともに、その適応、並びに、問題点に関して、検討を加えた。

25. 当院における胆囊癌症例の検討

姫野雄司、塙本 剛、志村賢範
宮司 勝(上都賀病院)

過去12年間に当院で経験した胆囊癌18例について、検討を加え、若干の文献的考察と共に報告した。18例中切除可能であったものは7例で、切除率39%であったが、うち5例の術前診断が胆石症であった。術前の症状は胆石症に類似した症状を呈するが多く、黄疸、腫瘍の出現をみた場合は、切除率が著しく低下した。切除例中2例が現在生存中であるが、切除症例の平均生存期間は決して長いとはいえない。

26. 食道癌症例の検討

高橋 修、松山迪也、足立英雄
四元徹志、椎原秀茂、篠原治人
(深谷赤十字)

食道癌手術は現在では諸技術の技術の進歩により比較的安全に行なわれる様になって来た。我々は24例の食道癌症例に手術を施行。占居部位、形態、術式、生存率等に対し検討を加えた。患者は高齢者が多く、その手術適応は慎重でなければならないが、摘除例は非摘除例に比し生存年数が長く、全身的、局所的条件の許す限り、積極的に摘除を施行すべきであり、縫合不全、術後管理等に対する経中心静脈栄養の効果が大きい事を知った。

27. 当院における進行消化器癌患者の癌化学療法

宮崎 勝、花輪孝雄、橋場永尚
彦坂泰治(八日市場国保病院)

進行消化器癌患者に対し、積極的に新しい癌化学療法の試みを行った。胆道癌3例に対し抗癌剤をPTCDチューブを介しての胆管内直接注入を施行し、1例に胆道の再開通を認め、1例にCEA、LDH値の低下を認めた。肝転移例および胃、大腸の切除不能例5例に選択的動脈注入を施行し、1例は現在施行中であり、4例中2例がKarnofsky P-Sにて1-A、1-Bを示し、50%の有効率を示した。選択動脈療法は手技がやや難しいが、切除不能例には極めてよい方法と思われた。

28. 直腸カルチノイド

岡田光生
(社会保険中央総合病院大腸肛門病センター)

直腸カルチノイド症を15例経験した。男12例、女3例平均年齢48才である。部位は歯状線上0cmより13cm平均6cmである。大きさは2.0cm以下のもの13例で、うち11例は偶然発見された。3例に筋層まで浸潤していた。3例は偶然発見された。3例に筋層まで浸潤していた。3例に直腸癌との合併があった。悪性カルチノイドは2例あり、1例は前方切除10ヶ月後に肝転移で死亡した。他は前方切除術時に肝転移があったが4年経過健在である。15例全例に内分泌的特徴は認めない。